

大阪市中央公会堂

大阪市中央公会堂は、第二次世界大戦前の大阪の最盛期「大大阪時代」の懐かしい面影を残しています。旧淀川の中洲、中之島の豊かな緑と輝く水面に囲まれて立つこの公会堂は、赤と白を基調とした外観が特徴的なネオ・ルネサンス様式の建物で、大阪を代表するランドマークのひとつです。ある民間人の出資によって当初建設されたこの建物は、これまで100年以上にわたって市民の暮らしの中で重要な役割を果たしてきました；大阪市中央公会堂は、世紀の変わり目に市民の要望に応じて再生工事が行われた後、重要文化財に指定されました。

人々の歴史

中央公会堂の物語は、1911年に地元の仲買人・岩本栄之助がその建設のために100万円を寄付したところから始まります。本人の談によると、岩本氏は実業団の派遣に同行して訪れたアメリカで目にした企業の社会貢献活動に感銘を受けたといいます。当時の100万円は、現在の数十億円に相当しました。

大阪市はデザインコンペティションを開催し、早稲田大学教授の岡田信一郎が優勝しました。岡田氏のデザインの実施設計には、辰野金吾、片岡安の両氏が選ばれました。辰野氏は当時日本で最も高い評価を受けていた建築家で、氏の設計による東京駅舎は、中央公会堂と同様、赤と白を基調としたネオ・ルネサンス様式で知られています。

公会堂は1918年に開館しました。開館してから数十年の間、公会堂では講演会や演奏会が開かれ、大大阪の人々に新しい考えや芸術運動をもたらしました。この建物は、第二次世界大戦中は空襲の被災者の収容所として使われ、戦後は政治討論やそれまで禁止されていたジャズなどの音楽の演奏が行われる場所となりました。

しかし、1970年代には、公会堂は修理が必要な状態となっていました。取り壊しも検討されましたが、大阪の建築家や市民が一体となってそれに反対しました。最終的に、1999年から2003年にかけて、耐震補強を伴う丹念な再生工事が行われ、建物はかつての壮麗な姿を取り戻しました。元の建物の部材は可能な限り修復・再利用され、戦時中に取り外された金具は複製されました。そして、正面アーチの上には、それぞれ芸術と商業を象徴するミネルバとメルキュールの像が数十年ぶりに再び設置されました。

現在、この公会堂は、中之島を水都・大阪の歴史を反映した散策が楽しめるリバーサイド地区へと再開発する大阪市の事業において中心的な位置を占めています。大阪市中央公

会堂は今でも大阪市民によって結婚式から合唱コンサートまであらゆる目的に利用されています。

公会堂の見学

公会堂は入場無料で、地下にある岩本氏の生涯や 20 世紀初期の大阪を紹介する展示室は誰でも入室できます。公会堂内の各集会室は貸切利用者しか入室できませんが、特別室はガイドツアーの一部として観覧可能です。

大集会室は、1 階と 2 階の大部分を占める 2 階建てのホールで、1,000 人を収容できます。ヘレン・ケラーやヴィルヘルム・ケンプなどさまざまな著名人を迎えてきたその舞台は、日本の古い舞楽の演目「蘭陵王」にちなんだ印象的な仮面で飾られています。

大集会室の上の 3 階には、中集会室と小集会室があります。もともとは宴会場だったこれらの部屋の内装には木材が使われており、日本の鳥の絵や公会堂が建てられた当時から残るシャンデリアなどのさまざまなディテールで彩られています。

また、3 階には特別室もあります。これはもともと、中集会室や小集会室とともに貴賓室として貸し出されていた部屋です。欧風のインテリアに和のテーマや芸術性を大胆に取り入れたこの部屋のデザインは、他のどの部屋より凝ったものとなっています。その中でも最も印象的なのはおそらく、イタリアで学んだ画家・松岡寿が日本の神話や伝説の場面をフレスコ画風に描いた絵画です。天井には、雲の上の世界でイザナギとイザナミが世界を創造するのに使う矛を受け取っている様子が描かれています。西側のアーチの上には、15 世紀に大阪に都を築いたといわれる仁徳天皇にまつわる有名なエピソードが描かれています；仁徳天皇は、丘の上から領内を見渡した際、家々の竈から煙が立ち上っていなかったことから民が貧困に喘いでいることに気づき、税の徴収をしばらく行わないことを決めました。

特別室奥側の壁の大部分を占めているのは、公会堂の正面を飾るステンドグラスの裏側です。200 枚のレンズガラスを使って作られたこの窓は、伝統的な鳳凰のモチーフと大阪市の市標である「みおつくし」と呼ばれる水路標識 4 つを組み合わせたデザインになっています。この窓からは、新たに開発された中之島公園エリアが一望できます。